

研究の窓

社会文化問題としての外国人労働者

倉 沢 進

ヴェトナムからの難民船が次々と漂着すると思ったら、実は中国からの移民労働者が難民を装って渡航してきたものとわかって、世論の風向きも変わってきた。ところが、日本の中小企業は、不法でも、無経験でも、ともかくも彼らを雇いたいという。人口の社会移動には、プッシュ型とプル型とがあることは、昔から論じられてきたことだが、これは間違いなくプッシュにしてプルである。政府当局は、不法入国というので、人返し策に出るようだが、プッシュにしてプルという基礎的経済的な状況があるかぎり、成功はあり得ないといってよいであろう。ボートピープルを装ったとか、海上からの数百人単位の一斉入国であるとかの物珍しさから注目を集めたわけだが、外国人労働者の流入という問題は、ここ数年間さまざまな形で進行してきた事態である。

パキスタンあたりから、彼らにとってはかなりの負担である航空運賃を支払い、女衞風の組織へ支払った上で、日本で働き半年後に母国へ帰れば、かなりの貯金もできるという条件があるかぎり、この流れを止めることは基本的にあり得ないことであろう。経済摩擦も、商品の自由化から、金融や情報の自由化、そして最後に労働の自由化を求める動きが出てくることになるだろう。そうだとすれば、外国人の単純労働者の受け入れは、これからの日本社会の不可避の問題となるだろう。

しかし外国人の大量の受け入れは、オレンジや牛肉の受け入れとは全く違う問題をわれわれに迫ることになるだろう。社会的文化的な適応の問題である。日本の国際化は、この適応過程を乗り越えて初めて可能となる性質のことである。

当面私が関心をもっているのは、彼ら外国人労働者が東京という大都市のどこ

に住むかという問題である。世界の大都市の外国人地域と比較して考えると、東京ならば、荒川、台東、墨田、江東の各区あたりに多くの外国人労働者が集まるのが、ほぼ常識といってよいであろう。実際の集住地区はこの常識とは違っている。確かなデータがかけているが、どうやら新宿大久保周辺、高田馬場、池袋周辺、大山周辺、川口周辺と、山手線西側ないし埼京線沿いを、北上しているように思われる。

説明要因は2つあるように思われる。ひとつは、木賃アパート地域という最も住宅条件の悪い、そして低家賃の地域という説明である。他のひとつ、そして私に関心をもつのは、荒川、台東、墨田、江東といった地域つまりいわゆる下町が、社会文化的に外国人労働者層を受けつけにくい地域なのではないかという説明である。逆にいえば、現在の集住地区である山の手の縁辺地区は、地域社会的な紐帯が崩壊し、匿名性の社会が形成されている地域だということである。

外国人労働者問題は、現在のところ、わが国の経済界の人手不足を補う労働力の問題、国際的な経済摩擦のなかでの問題としてなど、もっぱら経済的側面から取り上げられている。しかしどこに住むかの問題をはじめとして、実は社会的文化的問題なのである。さらにいえば、すでに中国系などにみられるように、外国人労働者は、単身の出稼ぎから始まるが、決してそれにとどまるわけではない。やがて結婚し、子供を産み、家族生活を送るようになる。病気も当然ながらするであろう。社会保障や、社会福祉のサービスの必要性も起こるであろう。もっぱら日本人のみを対象として編成され、運用されてきた社会保障や社会福祉の運用についても新しい対応が迫られるのは当然である。

日本型福祉という言葉は、大変に誤解を生みやすい。もしそれが、日本では家族を中心とした相互扶助システムが強力であるから、公的な福祉サービスは不要であるという議論なら大きな間違いである。しかし、微妙に形づくられた人間関係のネットワークのなかで初めて人間がさまざまな欲求を現実してゆくこと、日本の、特にたとえば下町の、社会的ネットワークがかなりの程度閉鎖的であることなどを考えると、そこに日本的な社会文化問題の根があることは認めねばなるまい。外国人労働者とその家族にとっては、公的な社会福祉サービスだけでは不足なのであり、人間関係のネットワークが生活資源として必要なのである。彼らがこれを、活用できるようになるためには、一方で彼らの自身の努力と、他方で日本社会のある種の変質を伴うかなりの努力が、われわれのサイドでも必要となろう。そしてそれを援助するような、行政的、社会的な仕組みもまた要請されることになるだろう。

(くらさわ・すすむ 東京都立大学人文学部教授・都市研究センター所長)